
「時効不成立」 8

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「時効不成立」 8

【Nコード】

N2998F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

五十歳を迎える狭間良孝は、パリで正月を迎えた。参碁朱美は、日本へ行った。日本の包丁人・料亭「上総」の総帥・権堂久次良が、死んでいた事を知らなかった。逃げた負い目は消えないが、背負った縁は、いつか消えるものなのか、消してしまったのか、なぜ総帥は、と思うと同時に、当然松山から自分の事は耳に入っていたはずだ。遠い昔思いに、潮時をひそかに思う……。

第7章 思い出の鍾

「時効不成立」 8

第7章 思い出の鍾

一九九八年、五十歳を迎える狭間良孝は、パリで正月を迎えた。

参碁朱美は、日本へ行った。

日本の包丁人・料亭「上総」の総帥・権堂久次良が、死んでいた事を知らなかった。

逃げた負い目は消えないが、背負った縁は、いつか消えるものなのか、消してしまったのか、なぜ総帥は、と思うと同時に、当然松山から自分の事は耳に入っていたはずだ。

外国へ行つて、重なる苦勞に、自分の事を重ねたくない。

そういう気配りの鋭い、総帥の配慮だと思うと、涙が流れた。

指折り数え、もう八年になるかと思うと、手近に有った紙と鉛筆を狭間良孝は取った。

「化石の恋もふた昔」

わだち避け

散び生えたるオオバコの

君に通じる狭き道

わき道枝道獣道

この先はどれが君への近道なのか

迷い疲れた足元に

春にも一対

冬でも一対枯れ松葉

手に取りて

思いぞ走る来し方の
化石の恋も二昔

金波銀波に

すすき波打つ江合の河原
詰襟ガ克蘭

高下駄履いて

霞に煙るはるか山並み
目で追いつつも

君を待つ少年の
黒き瞳に夕日が映える

いつ現れるかと振り向けば

肩で息するセーラー服は
土手に佇む

君が影

そも化石の恋は二昔

南のあすこか東のここか

北の向こうでならばと

よもや会えるか君が面影
探しあぐねたその果てが

月見るに

所変われど同じ月明かり
心の君を君と定めて遠き旅立ち

緑抱えて今ここに

散らび建ちたる家々は
洋の赤レンガ

道に迷いて

君いずこかの探し癖
咲く花を

秘めて燃えるも

化石の恋から二昔

紙に、そう書いた。

まったく自然だった。

二十年の空白は、一気に埋まった気さえした。

狭間良孝は卒業したら、東京の私鉄鉄道に就職する予定だったが、仙台市に就職が決っていた遊茶美枝子から、同じ宮城県内に居て欲しいと説得され、東京を諦め、高校の先生の世話で、古川市で彼の兄が経営する料亭「上総」に決めたのだった。

将来は、一緒に料理屋をやるうと言っていた事の全てを、彼女の突然の不明で嘘にされた。

それから二十年は、遊茶美枝子を心での探し癖が、流れ板前になっていた。

外国へ出る前、実家に挨拶と帰省したが、古川駅で下りたのには、理由があった。

狭間に、美枝子を引き合わせたのは、同級生の盾端竜子だった。

その竜子に、外国へ行くと電話で言った時、美枝子は古川に居ると教えてくれたのだった。

松島から、そして東京に移ってから、年に二・三度は竜子に、美枝子は、今何処にいるかと、聞いたのだったが、彼女も頑なに言わなかった。

偶然を装って古川駅で会った。そして一週間後、彼女は東京に来た。最後の、あの夜、遊茶美枝子は、高校時代の話だけをしていた。

狭間良孝にとって、それは残酷以外の何物でもなかった。

外国へ発つ狭間への餞のつもりだったのか、焼けばつくり火を点けたかったのか、それとも詫びたのか、狭間は考えようというより、そのどれでも、既に、どうでも良かったのである。

電話で、明後日東京へ出張が有って行くけど、会えるか、といわれた時に、綺麗に忘れる為のケジメを着けようと決めていたからだっ

た。

理不尽な行方不明という未練に、現実の足を引かれて生きてしまった狭間にとつて、どうしても線を引きたかった。

古川駅で会った時、狭間は線を引いた気になっていたが、その線を消し、新しい線を引かせたのは、遊茶美枝子だと、狭間良孝は自分に言い聞かせた。

流血悲惨なやり方とは違って、指一本触れる事もない、きわめてどこか自然な形で事は運んでいた。

遊茶美枝子も、こうなることを、まるで納得していたような出来事だった。

彼女が、上野のホテルで、テーブルに伏せ、最後に見せた笑みが、それを物語っていると思えば、殺人と言う言葉さえも、他人事に思えた。

おそらくそれは、過去二十年の空白が勝っていたからかもしれない。あれから既に、八年が過ぎた今でも、空白がそのまま延長しているようで、まだどこかに生きているようにさえ、狭間には思えた。

見える現実が消えても、見えない心に残っていた。

それほどまでに、狭間にとつての遊茶美枝子は理不尽に過ぎていた。否、苦しいながらも、明確な別れがあればよかったかもしれない。

と思った。

まったくの不明になっていた事は、狭間に未練を深め、災いを深くしていった事を、彼女自身も悟ったのかもしれない。

事情が分かれば何とか出来た、と言うのは結果論であり、果たしてどう出来たか、分からない。

言える事は、ナシの飛礫と言うやり方が、どうしても許せなかった。いたずらな混乱を受けたと言う被害者意識を持っても、仕方がないのではないかと、狭間は自己弁護を試みた。

その清算をし、海外に出たのだった。

盾端竜子とは女同士の連絡はあったようだが、狭間の話になると、美枝子はきつく竜子に口止めをしていたと言った。

あのまま、古川で会って別れていれば、ケジメの清算が出来たのだったが、なぜわざわざ東京に出てきたのか、出張のついでであつても、声を掛けて欲しくはなかった。

ケジメの杭が押し流され、空白の時に火がついたのだった。

フグ職人の松山克夫の店から、臓器を掠め取ることは簡単だった。

翌日の夜、焼肉の店で、臓器を混入して焼くと、うっかりすると、遊茶美枝子が、それをこつちに寄越しそうになつて慌ててしまった。フグ毒は早ければ二十分以内に症状が出ることも計算にいれ、明日の事があるからといって早々に引き上げた。

美枝子は宿に入ると、少し変だと言つて座り込んだ。

狭間は二十年の過去を思いながら、それを見ていた。

彼女は、少し顔を動かし、狭間を見ると、僅かに頬笑み、事切れた。なぜ殺すという事を考えるのか、狭間にも分からなかった。

毒薬、毒草と色々有る、果たして。

西洋夾竹桃、月桂樹、殺傷力のある毒草はいくらでもあつた。

ジャガイモのソラニン、ルバーブの根、ここから抽出した毒素で、

人は簡単に死ぬ事を狭間良孝は知っていた。

だが、なぜ殺したいのか、自分でも不明のままだった。

狂気の反対語は、正気。

これはなんだろ、どういうことだろう。狂気がどうかを誰が判断できるんだ。

正気だという証拠はどこにあるんだ。他人に迷惑をかけるから狂気か、迷惑をかけなければ、それを正気といつて良いのか、毒殺やライフル乱射を狂気の沙汰というが、戦争をしている兵隊は、狂気じゃないのか、それを指導する立場の人間は、狂気じゃないのか、殺人はなぜ悪い、法律で決まっているから、とでも言う気が、決められなければ、やっても良いのか？

どこかが違う。

狭間良孝は古本屋で手にした「毒殺日記」を読んで、そう思った。英国の著者アンソニーホールデンが、一九六〇年代に起きた毒殺魔グレーム・ヤングを取材して書いた物だった。

そして狭間は、自分の身の回りに、意外と多い毒に気が付いた。だが、仕事柄、フグ毒に勝るものはなかった。

店長になったケイから、電話で誘われたが、狭間良孝は煙草と酒を買いに出るだけで、このホリデーは終わった。

参碁朱美が日本から帰って来るのは、一月末になっていた。

仕入先への挨拶で忙しいわよ、と一度電話があった。

二月に入り早速、狭間良孝は参碁朱美の居るロンドンへ行った。

さすがに高山は腕がよかった。言う事は何もなかった。

「板前は看板の黒子でいい。会社の顔が店ならば、板前は黒子でいいやいんだ」

その黒子に徹した彼のやり方が、狭間も気に入った。

やはり、「上総」の出だけあった。

狭間は、ロンドンに来て、「寿司丸」の丸山登美子に挨拶ナシでは、と店に行ってみた。

「アラ、お久しぶり、日本から？」と丸山が、そこに居て、狭間を迎えた。

「パリからね」

「フランスから、ヨーロッパ旅行かしら、いいわね」

「どう、景気？」

「最近、店が増えるばかりで、押され気味よ、なんとかしてよ」

「はア？ 何とかしてって、まったくカワインだから」

「口ばかりで」

「え、じゃ、何とかすればよかったのかな」

「又すぐ勘違いする」

「又つて、そう言う言い方して来るのつて、いつも丸山さんじゃないの」

「まあいいけど、一寸付き合つてよ、どうせ暇なんですよ」

「暇つてね、言われて見ればそうですよ、それでしたんですから」

「一寸、文ちゃんお願いね」と丸山が、客席に座っていた板前の文吉に言った。

行つた先は、懐かしい隣の喫茶店だった。

「あの板前、頑張つてんだろつけど、客席にいるようじゃ、しょうがないね、丸山さん客席は客のであつて、従業員のじゃないんだから。俺が居た時、誰かあんな事してた？」

「そうなのよ、でも、人が居ないのよ」

「居ないんじゃない、来ないんですよ。それに、ラメシとメイ、店內恋愛は、この道では、ご法度、気を付けた方がいいです」

「え、それほんと？」と丸山が、思案顔になった。

「店のしごきに耐えられる金を出せば、人は居付くんですよ」

「安かつたかしら？」

「丸山さんが高いというのと、働く側が高いというのじゃ違うんですよ」

「キリがないじゃないの？」

「そうですよ、でもね、この位出して、どの位の事に耐えられるかを見るのが、経営者じゃないですか。お、やるな、もっと出そう、こつだといいますが、お、やるな、もっとやらそう、やつて当たり前なんだ。こつなつたら、必ず貴方の手を噛みますよ」

「噛んだわけ？」

「何言つてるんです、約束をきちんと守つたじゃないですか」

「そうよね、ごめんなさい」

丸山登美子はやはり素直な女だった。

だが、狭間は、ポリシーを持って、先頭に立つてやる参碁朱美とは違ふなと思つた。

ロンドンに二か月居ると、狭間は、イタリアへ飛んだ。

そこには、佐賀県出身の鎌田が居た。

九州の料理を中心に任されてはいるのだが、会うとすぐ、酒をもつと入れたい、と言いつ出した。

「十年以上の経験ある鎌田さんに言うのもおこがましいですが、酒の為の食事ですか、食事の為の酒ですか」と狭間は聞いた。

「場合にもよりますよ、酒の為のおかずなら、酒のため、食前酒なら食事の為、じゃないですか」

「じゃ、人は、なぜ食う？」

「腹が減るからじゃないですか」

「なぜ？」

「そりゃあ」と鎌田は少し、言い淀んだ。

「ね、じゃ、なぜ病院へ行きます？」

「痛いとかが、あるからじゃないですか」

狭間は、質問がややこしくなると思った。

「んん、酒をおかずの食事と、食事のおかず酒を取る。どっちが長生きすると思う？」

「酒は飲まんでも死にませんが、食事は摂らないと、すぐ駄目になると思うから、やっぱり酒はおかず、が良いと思います」

「つまり、酒は食事の為にあるんだという事が、証明された訳ですよ」

三か月後、ウィーンへ行った。

ここには、福井県から、安本という板前が来ていた。

優柔不断というタイプで、マネージャーが苦勞していた。

「少しぐらいの苦情で、只にしないように、只にすると、客は付け上がって、何度も繰り返すようになる。いつの間にか、客を乞食かゴロツキにしてしまう。只にされて喜んではるのは、乞食とゴロツキだけです。普通の客であれば、金は要らないから、二度と来るなと言われたと思うのが普通でしょう」

狭間が安本に言ってる間、彼は、熟んだ物が落ちたとも反応がなく、唸ってばかりいた。

時折寂しそうな目を向け、物腰の柔らかい、まったく人の良さそうな安本に、狭間は、同情すら覚えた。

こうして、ロンドン、パリ、ウィーン、ローマと回っている間、狭間良孝は、まるで癌の痛みを忘れたい為に、何かに熱中し、痛みを紛らわす癌患者のような心境で、動き回った。

充実の心が、時を忘れるのか、時の流れが速まるのか、二〇〇四年になっていた。

この年、ポーランド、ハンガリー、チェコ、スロバキア、スロベニア、エストニア、ラトビア、リトアニア、マルタの国々が新たにEU加盟を勝ち取った。

参事朱美は早速、ハンガリーのブダペストに「セーブ寿司」を開けた。

ヨーロッパに五軒目の店だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2998f/>

「時効不成立」 8

2010年11月16日08時12分発行